

3. パネルディスカッション

(1) パネリストからの話題提供

畦地：皆さん、こんにちは。高知県の黒潮町教育委員会の畦地と申します。ほとんどの方が、第3回のときに黒潮町に来て頂いてらっしゃるので、どんな町かご存知だと思いますが、改めてうちの町を紹介します。東日本の後に内閣府が南海トラフの次の新想定を出しましたが、34メートルという日本一の津波想定高をもらった町です。これを今私たちは自慢にしています。自慢にして、34メートルマークの缶詰事業を起しました。そして34メートルを逆手に取りながら、防災教育も進めたいなと思っております。そういうことがなくても、本当は本気でやらなくちゃいけないんですけども、非常に厳しい想定をもらったからこそ、本腰を入れるようになった。何でもそうですけど、二番じゃ駄目ですね。やはり一番はいいものだと実感しております。

本日は、この3年間で片田先生の下でいろいろな防災教育の実践をされた方々の代表として、7名の方にお集まり頂きました。今日のお話は「こんな防災教育をやりました」という話ではなく、「やった結果、こんな防災教育の可能性、一面が見えてきました、それをこの先、こういうふうにつなげたいんです」というお話をして頂くことになろうかと思えます。ですから、いろんな切り口が、本日は見えてくるので、それを是非学校に持ち帰って頂いて、これからの防災教育の実践に役立てて頂きたいと思っております。

それでは7名の方に、まずは自己紹介を兼ねながら、これまで防災教育とのそもそもの関わり、きっかけ、それから「取り組んでみて今こうなんだ」、「こんなことを感じています」ということをご発言して頂きたいと思えます。私の左から順番にお願いをしたいと思いますので、まず森本先生、よろしくお願いします。



畦地 和也（黒潮町教育委員会）



森本 晋也（岩手大学大学院教育学研究科）

森本：皆さん、おはようございます。岩手大学の森本です。私は、震災の前年度まで釜石東中学校に勤務をしておりまして、防災教育を担当しておりました。発災時は内陸の一関市にいたんですが、その後すぐ釜石の応援に行って、その後、4月1日からは、大槌町教育委員会で、学校再開のところをお手伝いさせて頂きました。その後、県の教育委員会に転勤になりまして、この3月まで4年間、県教育委員会で復興教育、防災教育を担当してまいりました。現在は、人事交流で岩手大学に勤務しています。

昨日は、連絡協議会に参加し得られた知見を基に、復興教育を通じて、県として、どういう政策ができるか、どういう取り組みができるかを昨日ご紹介させて頂いたところです。

今日のこの場を頂いたので、もう一度自身で「なぜ防災教育をやったのか」、そして、この連絡協議会で得られた知見を踏まえ、「震災前に釜石東中学校で取り組んだことはどうだったのか」を振り返ってみたいと思えます。

防災教育に取り組んだきっかけは、今から 10 年くらい前だと思います。初めて片田先生が、釜石で教員研修をやられたことがきっかけでした。私は釜石にトータル 9 年間勤務していたんですが、最初の 5 年間は、少し社会科で取り上げたことがあるくらいで、防災について正直自分の中で本気ではありませんでした。「湾口防波堤もできているし、大丈夫だろう」というのが正直ありました。そのようなときに、片田先生の講演に非常にカルチャーショックを受けて、「やっぱりやらなきゃいけないんだ」と強く思いました。

講演を聞いた翌年、釜石東中学校に転勤になりました。まず、担当した学年で、総合を使って、いろいろ取り組んだ。そして、フィールドワークをした。その時に、地域の昭和三陸津波を経験した方にこんなことを言われたんです、「防災は特別なことじゃないんだよ。大事なのは日常生活なんだよ。なんで靴を揃えておくかわかるかい。なぜ服をたたんでおくかわかるかい。すぐに服を着て、靴を履いて外に逃げられるようにするためだよ。」と。それが、片田先生の講演の次に大きなきっかけです。「防災っていうのは特別なことじゃないんだ」「普段の生活なんだ」というところで、また大きな衝撃を受けて、震災の前年度、本格的に全校体制で様々な取組を行うようになったというところでした。

震災から 5 年少し経って、自分が担当していた生徒で、発災時に中学校 2 年生だった子どもたちが、ちょうど二十歳になります。それで、5 年経過したところで、その子どもたちから、聞き取り調査を行っております。教師とすれば、自分たちがやったことを子どもからもう一回学ぶといいですか、どう成長したのかという結果を子どもたちから学ぶことは、教師の姿勢だと思うんです。防災に関して言えば、「災害が起きて、その時に避難した」というのは、ある意味で結果ですよ。そのため、あのときの子どもたちに聞くことこそが、大きな意味があるんじゃないかと思い、現在 11 人の子どもたちから

聞き取りをしました。そこで明らかになった点をいくつか紹介させていただきます。

一点目は『訓練の意味』です。子どもには、こう言われました。「あの時、がーっと揺れて、私は頭が真っ白になった。何をどうしていいかわからなかった。でも、体が動いていたんです」と。なかには、「危険を予測して、動いた」という子どももいるんですが、「どう行動していいかわからなかった。先生もいなかった。だけど、走っていた。そして、避難していた。」と。そして、「これは訓練のお陰なんだ」と、子どもたちみんなが言っています。

二点目は、子どもたちから、「大事なのは、僕たちが主体的に取り組んできた学習でした」と言われました。「ただ先生から話を聞くだけじゃなくて、自分が体を動かしたり、テーマを決めて、調べたりと、まとめたりしたことが大事なんだ」と。ある生徒からは、「震災前、僕たちは津波を知らなかった。だけど、フィールドワークで実際に被害があった場所に行った。そこで地域の人から話を聞いた。その場に立ってみた。ここでどれだけの被害があったのかを自分自身で学んだ。そして、それをまとめて、発表した。僕は、この取組が震災前だけど津波の経験則になったんだと思う。」と言われたんです。まさに学びがそこにあったんだと思います。

三点目は、まさに今よく中教審などでも議論されている『オーセンティックな実感にある課題、真正な課題』です。ある子どもにこう言われたんです。「先生、『てんでんこ』って習ったよね。あの時、『津波の時には家族が心配でも家に戻ってはいけない』というのが私は納得できなかったんだ。いくら警報が出ているとはいえ、なぜ家族が心配なのに家に戻ってはいけないんだ。迎えに行ってはいけないんだ。自分の中でこれが納得できなかったんです。」と。彼女の中では、この課題がずっと続いていたんですね。「それで、お家の人と家族会議を開いて、『子どもがいざという時にどうするか』を家族で確認した。私はお父さんにこう言ったんです。『会

社にいて、心配だからって学校に迎えに来ないで。お願いだから来ないでね。』って。お母さんにも言ったんです。それで、実際に震災の時、お父さんは『迎えに行かなきゃ』と思って、行こうとしたけど、『そうだ、娘に迎えに来ないでと言われていたんだ』と。もし迎えに行っていたら、両石町を通り、鶴住居まで帰っていたら大変なことになったかもしれない。」と。まさに子どもたちの中に、『我がこと感』といいますか、「本当にどうしたらいいんだ」という強い思いが育まれていた。ある子どもも、『自分たちは危険に遭遇するかもしれないんだ』と思っていた」と言っていました。

四点目です。当時防災教育を行っていて、『小学校でやって、中学校でもやる』というのが、自分の中で常に意識していたわけです。小・中が連携した避難訓練も初めてやったわけですが、ある子どもにこう言われたんです。「小学校の時に、偉い先生が来て防災の授業をやりました」と。これは片田先生のことです。「そのとき、津波に備えなきゃいけないと思ったんです。そして、中学校に行って、『小学校の時に習ったあれってこのことだったんだ』と、中学校の学習で理解できた」と。これは非常に大事なことで、当たり前と言えば当たり前なんですけども、改めて子どもの話から確認させてもらいました。

そして、五点目は、『助けられる人から助ける人へ』が大事なことであったんだ」というのが子どもの口からも出てきています。「自分たちにもできることがあるんだ」ということをその時に学んだし、「地域のために何かできるんじゃないか」ということで、子どもたちのアイデアで『安否札』を配布した。そして、その『安否札』が実際に被災時に役に立ったこともあり、子どもたちからは、「自分たちが地域に飛び込んでいくことが大事だ」という言葉も出てきています。「先生、安否札を配りましたよね。配ったら、それをもらった方が、『中学生からこんなものをもらったよ』と、まだもらってない人に話をしたんです」と。「中学生がこんなことしてくれ

たんです」というのが、回りまわっておばあちゃんからまた自分に戻ってくる。こういうことで地域のつながりもできていく。その子は「あのお陰で挨拶をする人が増えた」と言うんですね。それから、「私たちは日常の中でも話をするようになっていったんです」と。当時の中学校1年生、2年生の女の子たちが、友達の家で遊んでいて、「もし、ここで大きな地震が来たら、周りは大丈夫だろうか。建物は大丈夫だろうか。ここは、どこに避難すればいいのか。」と。「学区が広がって、行動範囲が増えている中で、そういうことが普通の会話の中で出てきてたんです」というようなこともできています。家庭や地域を巻き込んでいくことがいかに大事なのかを、改めて子どもたちから学び直しているところです。

畦地：ありがとうございました。森本先生からは、震災に遭われた子どもたちから目の当たりにした具体的な変化をお話いただきました。この後お話を頂くのは、これからその未来がくる可能性があり、備えておかなければならない地域で防災教育に取り組んでいらっしゃる先生方になります。大句先生、お願いします。

大句：小木中学校の校長の大句といいます。

地元の新聞紙上で、東日本大震災があった後、マグニチュード7.8級で11メートル以上の津波が小木港に寄せると載りました。更に、小木もリアス海岸なので、波がせり上がり、15メートルになるといわれ、衝撃を受けました。また、町の商業施設の前で、生徒会が募金活動を行ったんですけれども、「東日本大震災に募金をお願いします」と言ったところ、1時間で16万円が集まりました。子どもたちはお札を入れて下さるのを見て、「なんでこんなに」と思った時に、大人の人は、「小木もリアス海岸なので他人事ではないんだな」と実感はしていました。

そんななか、平成23年4月に防災教育を立ちあげた校長が小木中学校に赴任をしてきまし

た。今ここで東日本の大震災から学ばなければならぬんじゃないかと、校長は思ったんだと思います。そこで、「防災教育やるぞ」ということで、その時教頭だった私は、よくわからないけど、ついてきた次第です。

3年間振り返りますと、中学校の実践を報道機関も使って発信してきました。「今日これからこんなことします」とか、「来週こんなことします」ということを報道機関に連絡すると、取材に来てくれる。その取材は新聞社のこともあれば、地域の広報のこともあれば、テレビのこともあります。取材に来てくれると、子どもたちがインタビューを受けるわけです。子どもたちがマイクを向けられた時に、しどろもどろになるんじゃないかなと思ったんですが、割と堂々と話をしている。それは、「今まで行動してきて、自分のしてきたことを話すだけだからなのかな」と思うんですが、自分の言葉で語っているところを見て、凄い効果があるなと思いました。

そうした発信をしている時に、常に私たち、小木中学校は幸せだなと思ったのは、サポーターと言われる人の存在です。勝手にサポーターにしたのですが、元保護者です。平成23年は避難所体験をしました。その後ずっと今年まで、今年で6回目になるんですが、小木地区全体をあげて、中学校が呼び掛けた避難訓練を実施しています。また、避難経路のDVDを作ったときには、その時の校長が「100本欲しい」と無理難題を言っても、100本作ってくださった。というように、サポーターの方が増えていっているということも、ありがたいことです。

平成26年に自分が校長として小木中学校に戻って来たときには、同時に自主防災組織ができていました。前の校長が町の人に呼び掛けて、自主防災を作ったと思います。このように横につながりながら、これまでの6年間は活動してきたと思います。

小木中学校の防災教育は、小木もリアス海岸ということから始まりました。子どもたちも、



大句 わか子（能登町立小木中学校）



「小木から一人の犠牲者も出たくない」と呟いているわけです。それをどう実現していくかということで、まずは町の人にも、「津波って怖いんだよ」、「逃げて欲しいんだよ」ということを知ってもらいたい。そのために、自宅の標高を知ってもらいたい。しかし、ハザードマップは町では作られていませんでした。そこで、中学生がハザードマップを作った。この頃はまだ補助はもらっていなかったんですが、全戸配布をした。その他、中学生が主催で、津波フォーラムを行い、夜に集まって頂くという活動を行いました。

活動が続ける中で、たくさんの人に避難訓練に参加してもらうために、学校から飛び出して、地域のお年寄りと交流をする。保育園児と交流をする。その時に『防災の歌』を作りました。小学生と交流をする。小学生の授業の中に、津波のメカニズムであるとか、逃げ方であるとか、避難三原則とかを織り交ぜながら出前授業をする。そして、『防災体操』、『防災カルタ』というものも作りました。『防災体操』は大学生との交

流を通じて完成しました。

そして、避難訓練を実行しました。中学生が「〇〇町内は集まってください」と呼び掛けて、町内の方たちがその子どもたちの前に集まり、点呼をとりました。小木の人口は1,900名ですが、850名が参加してくれました。去年は810名。一番最初は300名です。

『授業の中で』ということで、このように『防災』のための時間を確保しなくても、国語、音楽、家庭科、技術の授業、総合的な学習等を織り交ぜながら、授業を工夫して、タイアップさせながら、無理なく防災を学習してきました。

『小木中の活動の発信』についてですが、石川県には『石川県子どもドリームフェスティバル』というものがあって、それに応募して、県の大きなステージで、津波避難三原則に関する防災劇をしました。すると、県の防災学習会で、もう一回やってくれないかという依頼がありました。そしてその後、『いしかわ教育の日』では、稲村の火を劇にしました。テレビや新聞に取り上げられたり、サポーターがDVDを作ってくれたりすることで、子どもたちが取材に答えることが多くなり、それに答える中で、自らの思いをより強くしていったように思います。

その他の外からの依頼では、「小木中学校は防災しているよ」ということが広まり、隣の中学校で活動する時に、「とっかかりとして、小木中学校の生徒が隣の中学校へ来て説明してくれないか」と言われたり、地域の生協が「防災学習会をしたいんだけど、出前講演会をしてくれないか」と言われて、中学校3年生20名が出掛けて行ったりしました。また地域の健康クラブから、「防災体操を教えてくれれば、お年寄りの60名の方がいつでもできるのにいいね」と言われたので、防災体操を教えに行ったり、活動が広がっていきました。他にも今日のような感じで、管理職に対してパネルディスカッションのパネラーなどの依頼もありましたが、頼まれたらいいやと言わないことにして、出ています。

授業の中で

- 国語・・・小学生にわかりやすく伝えよう。
「津波が起こるメカニズム」
「津波から逃げる」「避難所に必要なもの」
「あなたの家は海抜何メートル？」
- 音楽・・・防災の歌作り
→ 技術・家庭・・・保育園で披露
- 技術・・・標高看板作り、エコキュブラジオ作り
- 家庭・・・防災ずきんになる座布団作り
地震に強い家（家具の配置）
- 総合的な学習
・・・出前授業、避難訓練計画、防災学習会、
避難経路誘導灯（ペットボトル作りと設置）



子どもたちが、『防災カルタ』という大きなカルタを作りました。特に読み札がいいんですけど、逃げ方あるいは備え方などを、子どもたちが自分の言葉でカルタにしました。社会福祉協議会の方が、これを見られて「凄いいいから、400組作らせてくれ」ということで作ってくださり、地域の老人会、地域のクラブ、健康クラブ、小学校・中学校に配っていただきました。ところが、400組作ったんですけど、足りなくなりました。それで、今年また300組を作ったということで、大変ありがたいことだと思っています。

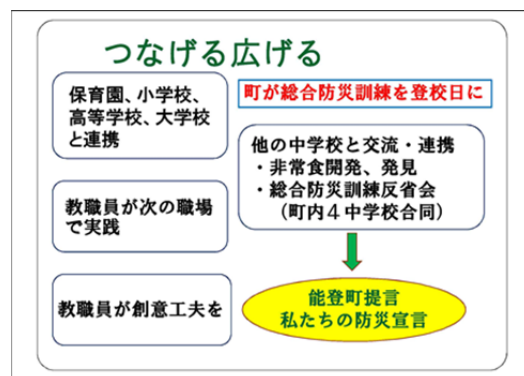
その後、県外からの視察で、多くの方に来ていただいています。畦地さんには2年前に来ていただき、昨年度、大阪から木下先生も来ていただきました。また今年5月には、摂津市から8名の方が来られました。その時、「これは利用するチャンスだな」と思いまして、子どもたちに、「摂津の方に小木のことを説明できるように、現地へ行って調べてきなさい」という課題にしました。子どもたちはいろんなことを発表してくれました。小木は漁港で、たくさんのインド

ネシアの方たちがいます。そのため、「日本語の看板だけでなく、インドネシアの人にわかる看板を作らないと駄目じゃないか」という子どもたちの発想から、看板を作っています。これを聞いた摂津市の方からは、「いろんな立場の人のことを考えているので、凄いね」と、私たちの気付かないことをまとめてくださったりしました。視察を通じて、客観的な意見を聞けて参考になったし、今後更に発展した防災教育を行ってきたいという意欲がより高まるという、思わぬ効果もあります。

また、畦地さんが視察にいらした際に、「外から来た人は、高台はどこの坂道から上がればいいのかわからないので、もうちょっと明確な避難の印がないと駄目なんじゃないか」という畦地さんのアドバイスを受けまして、避難所・避難場所への誘導灯として、ペットボトルを作って設置しました。これは、ペットボトルのような形をしたもので、ソーラー電池で夜になったら光ります。町から自主防災活動への補助金として、年間 200 万円を 3 年間もらっていたので、その予算でこれを買わせてもらいました。ペットボトルは、1 個 650 円します。

最後に、自主防災との連携についてです。自主防災の組織は、小木の町会長さん、青年会、商店連盟、婦人会、防災士の会の方々が連携して、能登町に申請したんだと思います。先ほどお話したように、町から年間 200 万円ずつ、3 年間頂いたので、備蓄庫を設置し、備蓄の内容を充実させました。毎月 15 日を防災の日にしているんですが、地区へのチラシを全戸配布したり、避難訓練の実施にも使っています。

『つなげる、広げる』ということで、保育所、小学校、高校、大学と連携してきました。また、去年から、町の総合防災訓練（日曜日）を登校日として実施されるようになりました。そして、「全部の学校で小中学生が避難所を開設し、住民を受け入れなさい」という話になりました。校長会でそれを聞いた他校の校長たちが、「どの学校も小木中みたいにできるわけがない」と



反対もありましたが、町は押し切りまして去年行いました。今年の 2 回目も、総合防災訓練として、小中学校登校日に避難所開設を行います。

他の中学校との交流や連携としては、輪島中学校とは新しい非常食の開発などを行っています。また、昨年の総合防災訓練の反省から、町内の 4 つの中学校から生徒を集めて、『私たちの防災宣言』というものの提言したりもしました。

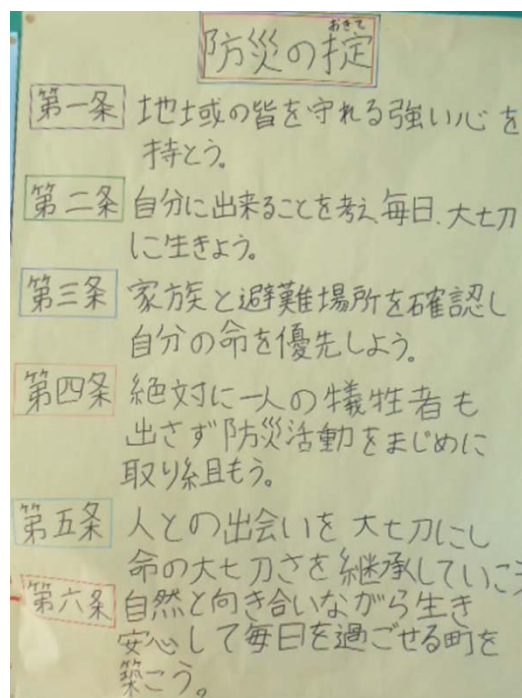
ちょっと話飛びますが、今年の 8 月 10 日に、夜の避難訓練を行いました。明るい時とどう違うのだろうかということを発見しました。これを行うときも、職員全員が賛成じゃないんです。皆が「これはいいことだ」と動くわけではありません。最初は、「なんでそんなことしなきゃいけない」とか、「たくさんやることがあるのに、新しく入ってこられると困る」とか、「本当に被災したわけでもないのに」とか、動きが鈍い、あるいは反対を向く職員はいます。しかし、今年は生徒会を担当して、去年今の 3 年生を担当していた先生が、「この子たちにも何か先頭だってやらせたい」ということだったので、去年卒業した子たちが「実現してほしい」と言っていた夜の避難訓練を実施することができました。その時、私は口をはさみませんでした。本当はもうちょっとこうして欲しいなと思っても、その先生が考えたようにやってもらいました。

ここ 2 年間は、岩手県の湊中学校に修学旅行でお邪魔しました。そこに行くことで、子どもたちは、湊中学校の子どもたちの強さと温かさ、そして全てを受け入れて、そのうえで自分たちの被災を語ってくれるその姿を見て、「防災は本

当にやらなきゃいけない」と刺激を受けてきました。今年は予算がないので、補助を出すことができず、湊中学校へは行けません。そんななかで、先ほど言った頑なだった教員が、「去年の修学旅行で行った後の子どもたちの活動を、湊中学校の人にお礼として送りたい」と、自分から湊中学校へお礼の資料を送りたいと申し出てくれました。頑なだった先生にも、長い時間がかかるけど、納得の仕方があるのかなと。子どもたちは凄く早く納得しますが、大人はなかなか納得できなくても、そういうふうな納得の仕方ができるのだと思います。

昨年、片田先生にも来ていただいたのですが、道徳の発表がありました。道徳と防災という切り口で、片田先生には講演もしていただきました。その時の子どもたちの全国学力調査の質問紙の「地域や社会をよくするために何をすべきかを考えることがありますか」という問について、全国が33%なんですけど、本校の3年生は66.6%。同じ質問紙を、今の3年生にこの春やりましたところ、もう少し高い数値が出ました。ということで、自分たちが自主的に行い、少しずつアレンジして、先輩と同じ活動ではなく、新しい活動を入れていくことによって、古さを感じさせず、またやらされ感が少なくやっているのかなと思います。

これまで、子どものつづやきが活動をつないできました。「小木から一人の犠牲者も出さない」、「避難参加者を増やしたい」ということから始まり、盛んな活動になってくると、どうしても無口な子は役割をもらえず、隅っこのほうにいます。それに気づいて、「あなた、これやってくれる」と声をかけると、「私にも役割をくれてありがとうございます」と返してくれる。「みんな、やりたいんだ」と実感しました。今年も、熊本地震を受け、2年生が「この小木が熊本地震を目の当たりにして何もしないわけにはいかないでしょう」という発言もありました。今そのように進んできております。去年の3年生、今の高校1年生が、後輩に残したいこととして



『防災の掟』を第6条まで作ってくれました。『命』という言葉が、いろんな形を変えて出てきていて、小木中の宝だと思って校舎内に貼ってあります。以上です。

畦地：僕も行かせてもらいましたが、小木中学校が一生懸命頑張って、地域が変わり、子どもたちが変わっていることは、現場に行くと本当によく実感できます。是非、皆さんも一度は小木中学校に行ってもらいたいと思います。

続きまして、嵯峨先生よろしくお願いします。

嵯峨：田辺市教育委員会の嵯峨です。よろしくお願いします。昨日も新庄中学校の担当の先生に、新庄中学校の取り組みを紹介して頂いたり、昨年度は田辺にも来て頂きました。今日は、個々の学校は様々な取り組みではなくて、田辺市全体としての取り組みを紹介させていただきます。

僕は6年前に教育委員会に入ったんですけども、3.11が起こって、1ヶ月後です。それまで、自分自身が全く防災を勉強していないなかで、その1年目に、ある大学の先生に新庄中学校で出会ったんですけども、「これだけ凄い防災教育をしているのに、なぜ他の学校には広まってい

ないの」と言われて、これは教育委員会の責任なんだと痛感しました。そういうところの反省から、田辺市全体で小中学校は 41 校と多いんですけども、この 41 校の子どもたち全員に防災教育を浸透させるのは、どういう方法があるのかなというのを模索しながら、今まで取り組んできました。田辺市は和歌山県の 22%、約五分の一の面積があるんです。端から端まで 1 時間半かかります。だから、災害種別が 3 種類あるというところなんです。

6 年前の 4 月に学校教育課に入りまして、課長から「防災を担当せよ」と言われました。それで、「震災当日どうだったんですか」ということを課長に聞いたんです。すると、大津波警報発令されたあと、沿岸部の学校に人手分けをして、「すぐに子どもを最上階に上げるように」と校長に指示を出したところ、「なぜそこまでしなければならぬのか」という声もあったようです。それから子どもに聞くと、「帰ってから親子で津波を見に行った」という子もいた。また、87 歳のおじいちゃんに聞くと、「もう 80 年間も、わしは津波を見てないから大丈夫だ」と言っていた。自然災害に対する意識が低いということを課長から聞きました。

余談になるんですが、先週、日本損保の方と話す機会がありました。47 都道府県の地震保険の加入率を見せてもらったんです。和歌山県は南海トラフがあるから高い方かなと思っていたんです。1 位は宮城県、高知県が 2 位でした。でも、和歌山県は 28 位だったんです。あまり関係ないかもしれませんが、意識がまだ低いのかなという気がします。

そんななか、半年後に台風 12 号水害が起きました。本宮という地域では、2 日間で 1,000 ミリを超える非常に強い雨が降りまして、土砂災害により国道も寸断されました。深層崩壊という大きな地滑りが発生し、非常に被害が大きかったところです。山だけでなく、河川もはん濫し、スーパーの 2 階のところまで水が来ました。世界遺産の本宮の大鳥居の前も浸水しまし



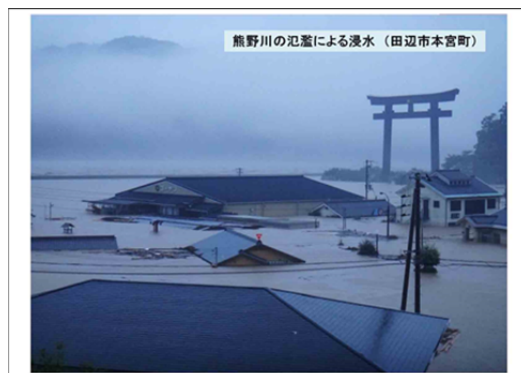
嶮口 善一（田辺市教育委員会）



東日本大震災時の田辺市の様子

・大津波警報発令後、学校教育課長から指示。
「...そこまでしなければいけないの」
帰宅後、親子で海岸へ津波を見に行った。
「なぜ逃げなかったのか？」
「今まで 80 年生きてきて、そんな津波は見たことがないから」

自然災害に対する意識の低さ



た。この台風によって、田辺市全体で 8 名が亡くなり、1 名が行方不明者となりました。また、数ヶ月間、避難せざるを得ないというような状

況の地域もありました。

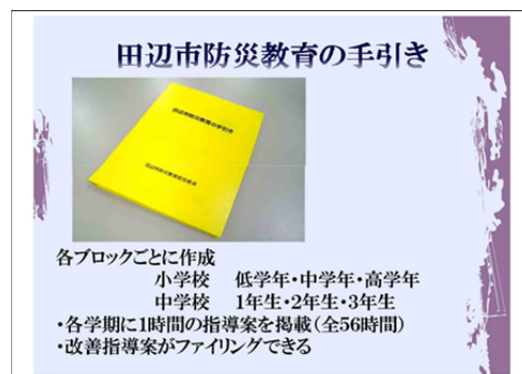
この状況を目の当たりにした時に、「津波想定防災教育だけでは駄目で、津波と洪水と土砂災害、この3つを一緒にしていかなければいけない」と教育長から言われました。もの凄く難しいことだと思ったんですけども、「まず何をするか」と考えたときに、組織を作らなければいけないと思ったんです。

それで、翌年、防災教育担当者会というのを立ち上げました。3種類の災害に対応できるように、沿岸部ブロック11校、中山間部ブロック10校、山間部ブロック2校と、全41校を3ブロックに分けて組織作りを行いました。

平成25年度からの取組の概要です。平成25年度は1年目なので、市民の人たちにも周知をしようということで、防災シンポジウムを開催しました。片田先生と当時釜石高校3年生だった菊池のどかさんに来て頂きました。500人くらいの子どもが参加したのですが、感想を聞くと、大人からではなく、菊池さんは高校3年生でしたが、子どもからの言葉、語りに胸を打ったという感想が多かったです。

それから、新庄中学校はいろいろしていたんですけども、他の学校はあまりしていなかったもので、各学校で1年間、防災教育として、どんなことをしたのかをとりまとめ、取組集を作りました。

平成26年度から、釜石さんとか尾鷲さんのような手引きを作ろうということで話し合いました。教職員が600人、子どもが6,000人いて、非常に広いということで、まず何をすべきかを話し合った時に、「やはり子どもたちの意識を変えなければいけない」ということになりました。そして、子どもの意識をどうするのがいいかと考えたときに、やはり「先生方の意識を変えなければ、子どもには伝わらない」ということになりました。41校から担当者が1名ずつ担当者会に出て頂いて、平成26、27年度で手引きを作ることにしました。自分も教師ですが、「自分で授業を作るという、苦しいことをすることに



よって、先生方の意識も高まるんじゃないか」と考えまして、2年間かけて手引き作りを行いました。それで今年は、手引きを使った授業を4月から始めさせて頂いて、8月3日にその成果の交流会を行ったところであります。

防災教育の手引きは、ブロック毎に作成しているんですけども、小学校低・中・高学年、それから中学校の1年生から3年生まで、各学期に1時間の指導案を用意するという一方で、全56時間分の指導案を作っています。全て先生方の手作りです。この指導案集の特徴として、改善指導案をファイリングできるような形で作りました。現状の案は最低レベルというか、「これくらいの防災教育はしたいね」という教科書みたいなものなので、「これを基に、どんどん実践を重ねて、改善してってください」と先生方にはお伝えしているので、ファイリングできるようにしています。

それから、昨年度、黒潮町で太田先生の授業を見て頂いたと思うんですけども、昨年度は2学期に3部ブロックの代表者に授業をして頂きまして、それを皆で視聴して、交流しました。

これは今年も行う予定であります。

この手引きなんですけども、4月以降様々なメディアに取り上げられまして、全国から画像の問い合わせがありました。例えば、ある町の防災管理局から「それを頂きたい」であるとか、自主防の会長さんからも声を掛けて頂きました。一番印象的だったのが、目の不自由な方がこの手引きのことを知ったらしく、点字図書館を通じて教育委員会に電話が掛かってきまして、「頂けませんか」というお話も頂きました。非常に嬉しかったです。

今後まずはこの手引きを使って、各学校でどんな成果が得られたのかを検証しながら進めていきたいと考えています。

畦地：続きまして、松本先生、お願いします。

松本：皆さん、こんにちは。新宮市立緑丘中学校の松本といいます。私は大学を出て、横浜市立工業高校に就職をさせて頂いて、電気科の教師をしていました。その後、Uターンで地元の学校に帰ってきました。先ほどの嵯峨先生のお話の中で水害のあった地域が私の出身地になります。

田辺市さんとは平成の大合併により、隣同士になりましたが、それまでは5つ、6つ離れた市でした。新宮市も平成23年の水害では、先ほどの紹介された地域の下流にあたるので、大打撃を受けています。新宮市は、学校統合等ありましたので、現在は小学校と中学校が5校ずつ、いずれも同じ学区となります。山間部が2校、沿岸部が3校ということです。

本校は、各学年3クラス、特殊学級が2つということで中規模校になりますが、新宮市の中では、割と大きめの学校になります。

先ほどの水害が発生した9月4日に、全校集会を実施し、その後実施する防災公開授業までの期間を、『防災を学ぶ期間』と位置付けている状況です。今年は、9月4日が日曜日なので、2日金曜日に全校集会を実施する予定です。それから、防災講演会をどなたかに依頼しているん



松本 潤 (新宮市立緑丘中学校)

自己紹介

新宮市について

- ・紀伊半島南東部に位置
- ・5小中学校区があり、うち3校区が沿岸部

本校について

- ・各学年3クラス 特支学級2クラス
- ・9月4日の全校防災集会から11月の防災公開授業までを位置づけ

Page 1

ですけど、今年は地元の先生にお願いをしています。そして、全校で防災公開授業を実施するまでの期間を区切って、集中的に防災教育を行うようにしています。以前は年間計画にバラバラと取っていたんですけども、ここに集中する形になっていきました。

平成23年の水害の様子です。軽トラックが崖に引っかかっています。この道は国道で、左側が川なんですけど、ここから川底まで十何メートルあるんです。軽トラの位置まで水で上がったということは、どれだけの水位になっていたのか。川幅は300メートルくらいの川なので、いかに大量の水がきたのかわかると思います。我々は雨の多い地域に住んでいるので、雨には慣れっこんですけど、この時ばかりはとんでもないことが起こったと思っています。先ほど嵯峨先生が本宮大社の写真を紹介してくれましたけど、あの本宮大社が熊野神社の全国の総本部です。それが100年前にも流されて、上流の奈良県の十津川村というところが大打撃を受けて、北海道に集団移民をするというよう

な水害がありました。それとほぼ同等ではなかったかと言われています。

昨年の全校防災集会では、黙祷に始まり、災害への備えについて学校長から話があり、それから、私が昨年行われた田辺市の推進連絡協議会のことを報告させて頂きました。それから、防災組織や、給食で防災食を出したので、それについての説明等を行いました。集会といっても、人数がある程度いるので、対話型の集会ではありませんが、「ここから防災の学習をしていくよ」というスタート地点に立つという意味合いも持っています。

防災の授業は、座学的な授業ではなくて、調べて、まとめて、発表する形式を比較的取っています。公開授業の前にも当然防災授業をしていくんですけども、公開授業に先立って、いろんなことをやったりとか、公開授業の日に2時間セットで防災の授業を行い、2時間目を公開しているというクラスもありました。公開授業には、保護者だけでなく、地域の方にも呼び掛けましたが、参加者が少なかったのです。そこで、今年は10月1日の土曜日に開催してみることになりました。

去年なんですけど、元校長をしていた社会科が専門の先生に非常勤講師をしていただいているんですが、その先生が地元の新聞記事に大変お詳しく、南海大震災の新聞記事などを集めて、特別展示してくれました。公開授業のときにこれも公開させて頂きました。

私自身は今の学校に来るまでは、教育委員会では7年間指導主事をしていて、防災教育を担当していました。そのときの経験も踏まえて、意識していることなどをお話させて頂きます。

まず、『防災教育の重要性を、全職員が認識をするようにすること』はかなり意識してきました。教育委員会にいた時は、全学校の先生でと思いましたが、学校に赴任してからは、今の学校の全職員で、ということを意識するように心がけています。今は、何かがあった時、必ず職員朝礼で伝えるようにしています。熊本地震



もそうでしたし、どこかで地震があったとか、どこかで災害があったとか、そういう話をして、そんな時に必ず意識を持てるようにしています。そして、それを子どもたちに教えていくことが、いかに重要かっていうことを認識してもらおうとしています。

右側の写真は、学校の屋上の高さを示しているものです。左側の写真は、市の防災対策課が設置した鍵ボックスの説明の掲示です。学校の屋上が避難場所になっているので、震度5弱以上の地震が起きると、鍵ボックスのロックが外れて、鍵が取り出せるようになります。避難してきた住民の方が、その鍵を使って開けられる

ようになっているのですが、これもまだまだ周知が足りていないので、是非広めていきたいと思っています。

他に意識してきたことは、『系統立てて、継続して実施する仕組みを確立する』ことです。先ほどの防災集会は、現校長のアイデアです。校長が「やるぞ」と言いました。校長自身は、前回の水害で自校の生徒を3名亡くしています。その思いは、やはり大変重いもので、「もうこんな思いをしたくない、させたくない」という思いがありました。そんななかで、校長のリーダーシップが発揮されているところではあります。また、それに対して、私自身もそうですし、全職員がどうやって継続していけるのかなっていうことをかなり意識をしてきました。

それから、最後に『自主性』です。教育委員会にいたときは学校の自主性を重視しましたし、学校に赴任してからは各教職員の自主性を重視しましたし、先生方には生徒の自主性を重視するようにしてもらっています。特に教職員には、「防災の授業をいかにうまくやるか」ということもそうなんですけれども、「負担にならないように」というか、「うまく工夫して」というか、「自分のカラーを出して」というようなことを伝えています。だから、内容についてどうこうと伝えたことはあまりありません。

以上、本校の取り組みについて紹介させていただきました。ありがとうございます。

畦地：続きまして、西本先生、お願いします。

西本：大方中学校の西本といいます。私は黒潮町5年目で、昨年度まで佐賀中学校に4年間おりました。昨日、宮川先生が大方中学校の実践については発表してくださいましたので、私からは、佐賀中学校でのことを中心に話をさせてもらいたいと思います。

4年前、佐賀中学校に赴任しました。その時に、最大津波高が34.4メートルという想定が公表されたことで、職員もどうするんだというこ

意識してきたこと②

■防災教育を系統立て、継続して実施する仕組みを確立する



Page 8

意識してきたこと③

■自主性を大切にする



Page 10



西本 貴俊（黒潮町立大方中学校）

とで、非常に困った感が強かったスタートでした。そんななかで、高知県の実践アドバイザー事業というのがありまして、その事業を受けることになりました。そこで、避難訓練を実施した後、大学の先生による講演会がありました。昨年度、黒潮町に来て頂いた方には、避難路として整備された道をのぼってもらいましたが、当時はまだケモノ道でした。全く舗装されてない道で、雨が降れば滑る、長いこと木影でするので、雨が降った後は何日も乾かないという状態でした。そのような状態だったので、私はその

避難訓練の際、下山の時に足を滑らせて、手に枝が刺さってしまい、枝が刺さったまま病院に行くことになってしまいました。そのため、アドバイザー事業の講演会を聞いていませんが、その大学の先生は、「この地域は、大きな津波が来たら諦めてください。命は助かりません。」と言われたそうです。そして、翌日、その話を聞いた3年生の担任の先生が私に「あなたはいなかったからわからないだろうけど、昨日腹が立った」、「なんで津波が来たら諦めなきゃいけないんだ」、「何のために講演に来たんだ」、「助かることを教えないと、何もならないのに」と言ってきました。「じゃあ、自分らで子どもの命を守るためにどうするか、やっぱり自分らでやっていかなきゃいけない」というのが、佐賀中学校の防災教育の始まりでした。

その先生を中心に、何もないなかで試行錯誤して、保管しているビデオ、3.11の映像やドキュメントを基に、その先生が中心となりまわりの先生を先導して授業を行っていってくれました。そんななかで、2年、1年の学級も、その先生の資料を基に授業を進めてくれることになりました。この時は、本当に自発的に先生方が動いてくれて、「防災について取り組んでいこう」という機運は高まっていきました。しかし、翌年度、その先生が異動になりました。

実践的防災教育推進事業を受けたんですが、メンバーが変わったことによって、ここで少し後退をします。『人任せの防災教育』という感じになってきたんです。「授業をこなしていけばいい」という風潮が広がっていく中で、「じゃあ授業はどう組み立てていくんだ」という葛藤がありました。一方で、小学校と連携をすることになり、小学校の先生と意見交換をすることが多くなりました。また、教頭会でも防災教育について、年に4、5回話し合いをし、防災教育の実践事例を基に、どう進めているのかを念入りに話をしてきました。そういったものが支えになって、少しずつ形ができたのが2年目でした。

そして3年目、町で防災教育の作業部会を立

ち上げて、津波防災プログラムを作ることになりました。ここで町長が前を走って、教育委員会が先導してくれて、我々がついて行くという形がスタートしました。今から2年前です。そこで、片田先生、金井先生はじめ群馬大学の方々に助言を頂き、「命は自分で守るもの」、「自分で守れる子どもを作っていくことが大事」、「諦めることはない」と助言を頂き、心強くなり取り組みを進めていきます。

そして、取組の中で思ったことは、避難訓練を重ねるなかで、子どもたちは間違いなく行動が身に付いていくということです。例えば、数年前に発生した伊予灘地震では、黒潮町は震度4の揺れでしたが、ある子どもは非常持出袋を持って、お父さんに「今から逃げよう、すぐ逃げよう」と言いました。ところが、お父さんは「津波は来ないから大丈夫」と言い、その直後、テレビに『津波の心配はありません』とテロップが流れて、「ほらみてみろ」と言われたそうです。その時に、その女の子は涙を流して、「もし来たらどうするの」、「お父さんがそんな考えだったら、私も死んでしまう」、「地震が来たら逃げるのが大事だから、やっぱり一緒に逃げて欲しかった」と訴えたそうです。そういった子は数名おられますし、夜でしたが、避難場所に逃げた子もたくさんいました。これまでやってきたことが、子どもたちの力になっていることは間違いありません。

そして、町が進めている防災教育も、町が主導で行ってくれていることもあり、管理職をはじめ教職員も、少しずつ意識が高まってきていることも確かです。ただし、教職員に『我がこと感』があるかという点、そこは少し疑問です。昨年度、作業部会の活動として、佐賀中学校で授業研究を行いました。その授業研を行う際には、先生方が自分のこととして研究を進め、そして、授業の素案作りを行ってくれました。そういった何かのきっかけがあって、教師が自分のこととして捉えてくれると、子どもたちの心を打つ授業ができるのかなと感じました。やは

り、子どもに『我がこと感』を持てと言う以上、教師が『我がこと感』を持って取り組むことが、一番大事ではないかということを強く思っております。

佐賀中学校で『佐中祭』というイベントを行っています。そこであがった収益を、2年前から子どもたちは地域の人と一緒に、社会福祉施設と東日本大震災の被災地の中学校に寄付しております。僅かですが、少しでもお役に立てればということで、生徒会からの寄付という形で行っています。これはまだ学校としてのつながりにはなっていないので、今後は生徒会同士のつながりから学校同士のつながりへと発展していくてくれればなという思いもあります。

また佐賀中学校では、今年から専門委員会の中に防災委員会が立ち上がりました。これは、子どもたちが地域のボランティアや防災について考える場を作るために立ち上げました。私は異動してしまったので、実際の状況はわかりませんが、先日も新聞で報道されたということなので、頑張っていてやってくれていると思います。

このように、本当に一人の教師の怒りから始まった防災教育ですが、教師が真剣に防災教育と向き合っていかなければ、進んでいかないとだと強く感じております。

畦地：先生がお話していたのは、平成24年度のアドバイザー事業ですかね。私は25年度から教育委員会にきたので、その事実を知りませんでしたけれども、聞いていた先生は、「馬鹿にするな」、「俺たちの命はどうでもいいのか」という怒りが、大きなエネルギーになったということなんだと思います。そういう意味では、その講演に来て頂いた大学の先生に感謝したほうがいいのかもしれないね。

続きまして、五十嵐先生、お願いします。

五十嵐：新潟県の魚沼市立湯之谷中学校の五十嵐一浩と申します。よろしくお願いします。ここに並んでいる先生方と私が大きく違う点は、新潟



五十嵐 一浩（魚沼市立湯之谷中学校）

県の場合、もちろん津波の危険もあるんですが、多くは土砂災害とか水害とか、内陸部で発生する災害を主にしているところかなと思います。私が防災教育に取り組んだきっかけは、平成16年に発生した新潟中越地震です。私自身も被災しましたが、地震が起こって、目の前で、本当に手の届く距離で、一人の人間が死んでいくのを目の当たりにしました。そこから、「災害から命を守る」、そのためには「子どもたちに自分で自分の命を守るっていうことを身に付けさせなければいけないんだ」と強く実感して、防災教育に入っていました。

ここで私も、十何年間どんな防災教育をしてきたかをお話したいんですけども、素晴らしい実践をされている方々がいっぱい話をさせていただきましたので、私は、『防災教育が果たす波及的な効果』についてお話をさせて頂きたいと思います。今『波及効果』という言葉を使いましたように、防災教育は『命を守る教育』であることに間違いありません。これが防災教育の唯一無二の目的であることは間違いありませんが、やっていくなかで、いろんなところに効果が現れている。それをご報告したいと思います。

本日お話しするのは、新潟県内にあるA中学校で取ったデータを基にしています。ここでデータを取ったA中学校について簡単にご説明致します。A中学校は新潟県の中規模都市に立地しています。全校生徒は約300人。13学級の中規模校です。校区内は住宅地と農地が混在していて、保護者は古くから続く地場産業や農業に

従事している方が多くいる。そういう学校です。

そして、このA中学校が防災教育に取り組んだのは、2012年に新潟県防災教育プログラムのモデル校に指定されたのがきっかけになります。それまでは、ほぼ防災教育とは無縁の学校でした。2012年に指定されましたので、翌年から何をするかを考え始めたのがスタートです。ですから、実質的な始動は2013年からとなります。

2013年は、年間20時間の防災授業と、地域や外部機関と連携した避難訓練を実施するとともに、校内防災教育推進教師を校務分掌上に位置付けて、防災教育推進委員会を校内に設置しました。

2年目の2014年は、小中学校による一泊二日の防災キャンプ、学区内に小学校が3校あるんですが、それらの小学校と合同の避難訓練を実施しました。それに伴って、小中合同の防災教育推進委員会を立ち上げました。この年から校区内の小学校でも、防災教育がスタートしています。

2015年には、3年生全員で中学生自主防災団を組織しまして、年間10時間の防災訓練を受けるようになりました。

今年度については、市の防災訓練と同日に、地域をあげた避難訓練を行っています。また、全学級が防災授業を地域の保護者に公開したり、共に授業を作り上げたり、避難所での高齢者対応として、福祉授業も始まったところ です。

このように、A中学校での防災教育は、年々質量共に拡充してきたわけですが、これに比例して学力も上昇してきました。このグラフは教研式標準学力検査、通称NRTの学力偏差値を2012年から今年度まで表したものです。防災教育の始まった「2013年から着実に上昇しています」と言うと、「2013年が一番低いじゃないか」と思われるかもしれませんが、ご存知のようにNRTの結果は、前年度の結果を表しますので、2013年度の実践がもし学力に反映するとなると、2014年の結果になるわけです。ですから、学力が徐々に向上していると言えるかと思いま



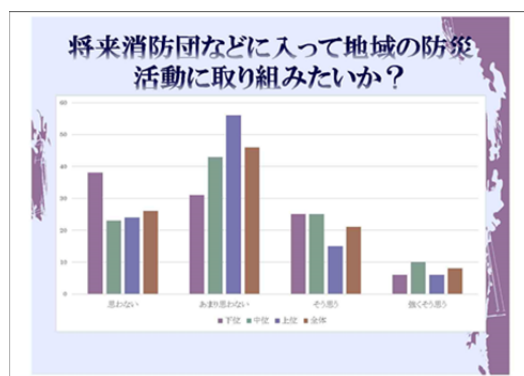
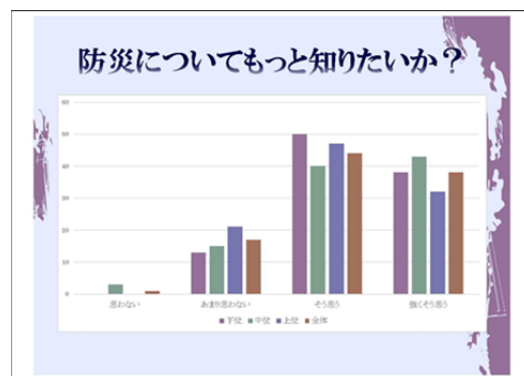
す。教科別に見ますと、国語、数学、英語でその傾向が顕著に表れていて、国語と数学でおよそ3ポイント、英語では4ポイント上昇しています。更に、各年度の入学生を学年別に追跡したグラフを作ってみると、1年生から2年生では変化がなくて、3年生になると上昇するという共通点が見られます。

さて、ここまで『計測可能な学力』だけを特化してお話してきましたけども、『数値化できない学力』というものも当然あるわけで、私たち教員は、むしろそちらのほうを重要視しているようなところもあります。実は、A中学校では2013年以降、作文や絵画など、『考え、判断し、

表現する』という能力を必要とする分野が飛躍的に向上してきました。校内の到達度評価、いわゆる通知表の成績で、5段階中2に該当する生徒が校内にいません。また、人権作文や明るい社会をつくる作文、税の作文等で、県レベルでの優秀作品に連続して入賞するようになっています。絵画でも内閣総理大臣賞を受賞する等、表彰が相次ぎました。県の防災ポスターコンクールがあるんですが、入賞者のうち、特選を含め7割を超える生徒をA中学校が占めました。これは、まさに防災教育が始まってからの成果であります。

このように防災教育の進展と共に学力が上昇した生徒は、防災教育をどのように捉えているのかということを調べてみました。調べる前に、おそらく学力の高・中・低にあわせて結果が変わるんじゃないかという仮説をたてました。そのため、NRTを基に生徒の学力の上中下の3段階に分けてあります。

最初に、防災教育の重要性をどのように認識しているかを確認するために、『防災学習は大切だと思いますか』と質問しました。その結果、80%以上の生徒が重要性を強く認識し、大切ではないという生徒は0%でした。次に『防災学習は役に立つか』という問いでは、やはり80%以上の生徒が強く役立つと認識していて、否定的な生徒は2%でした。更に、防災学習への関心意欲を確認するために、『もっと防災について知りたいか』と問いました。関心があると答えた生徒は82%、ない生徒は18%という結果になりました。学習の成果を計る指標はたくさんあるんですけど、『心の奥深くまで学習目的が浸透している』というのは、『学びで生まれた思考を行動に移せる』ということだと私自身は考えています。そこで、『将来、消防団等に入って地域の防災活動に取り組みたいか』と問いました。結果を見ると、取り組みたいと回答した生徒は30%でした。数値は低いように見えますけども、このA中学校が立地している自治体の消防団の加入率が1.2%であることを考えると、この結果



はむしろ高いんじゃないかと考えています。

これらのアンケート結果を学力段階別に見ると、防災学習の意義や意味を感じていかどうか、防災学習への関心や意欲については、学力にあまり関係ないことがわかりました。これは、他の教科学習においては、ほとんど見られない現象だと思います。例えば、社会科が得意な生徒は、社会科に関心があり意欲がある。社会科が苦手な生徒は、社会科に対する関心や意欲が低いというのが一般的だと思いますが、どうやら防災教育については、そういった傾向が見られないということがわかります。むしろ学力の高位層や下位層よりも、中位層が防災学習に対しての関心があり、今後活動をしたいというような意欲も強いということも若干わかってきます。

最後になりますが、今日のお話は研究の半ばで、こういった場で発表するのはちょっと躊躇しました。とりあえず中間報告みたいな形でご報告させてもらいました。そのため、研究の半ばで言えることは、「少なくとも『防災教育をすれば学力上がりますよ』というような単純なこ

とではない」ということだと思います。例えば防災教育のカリキュラムをどういう構成にするか。子どもの学びの過程をどうするか。それに指導する教職員の協同性をどういうふうに構築するか。生徒の主体性をどう担保するか。おそらくこれ以外にもまだあるんじゃないかなと思います。『そういった要素が、防災教育を通じて学力の押し上げ要因になっている可能性がある』とこの場ではお伝えしたいと思います。こういったことについては、今後専門家の方や研究者の方にご協力を頂いて、更に研究をつめていきまして、これらの関連性を考えていきたいと思っています。

畦地：先生方にとって、学力は最も関心が高いことですよね。五十嵐先生がおっしゃったように、『「防災教育をやれば、イコール学力が上がるんだ」という単純なものではない』とは思いますが、その可能性があることに関しては非常に興味深い内容ではなかったかと思います。

続きまして、林先生、お願いします。

林：林宣行です。和歌山県の串本町の古座小学校に勤めています。実家が、古座小学校から30分程的那智勝浦というところ。那智勝浦は非常にいいところで、4つの日本一のものを持っています。

一つは、落差133メートルの那智の滝です。那智の滝の那智の原生林は40から50。雨が降った時は、もうちょっと増えると言われているんですけどね、たくさんの滝があります。この滝では滝行もできます。修行される方も多いです。そのうえ、那智高原という昔、天皇陛下が植樹祭にも来たことがある場所があって、133メートルの滝にちなんで、133メートルのスライダーがあります。300円くらいでマット借りれば滑り放題です。

次は、海の日本一です。はえ縄漁による生マグロの水揚げが日本一です。勝浦にはマグロの食べられる店が30軒あります。私の家では、



林 宣行（串本町立古座小学校）

一週間マグロを食べないなんてことはありません。大体二日に一回はマグロが出てきます。とっても美味しいです。

次に川の日本一。13.5メートルのぶつぶつ川は、日本で一番短い登録河川です。

最後は、山の日本一。遠くに霞んでいるのが富士山なんですけども、富士山が見える最遠の地、日本で一番遠いところから富士山が見える場所が勝浦になります。

勝浦はとってもいいところです。これを、子どもたちに教えて欲しいんですね。『自分の地域に誇りを持って、好きになる教育』は、立派な防災教育で、とっても大事なことだと思います。

毎年9月に勝浦のお祭りががあります。今年は18日です。私は10年くらい中学生に祭りの指導をしているんですけども、今頃、私の所属している青年会のメンバーが船を下して祭りの準備をしていると思います。明日から練習が始まります。地域に残る伝統や文化を子どもたちに伝えて、それを守っていくというのも、やっぱ

り大事な防災教育なんですね。

和歌山県出身の先生方からお話がでてきていましたが、2011年9月2日に電話が掛かってきて、「台風が来ているから船を安全なところに移そう」ということで、みんなで船を移しました。次の日の朝見に行ったら、結構雨が降っていたんですけど、こういうような状態でした。そして、その次の日がスコールのような大雨で、9月4日に行ったら、雨が船の中に入って、船がほとんど沈んでいるような状態でした。見比べてもらえると、凄い量の雨が降ったんだなというのがわかると思います。

この後、昔からの習慣で、海を見に行っただけですけど、9月3日の朝と9月4日の朝で、海の色が違うのがわかると思います。9月4日に紀伊半島大水害が起きました。この後、道を走って行ったら、JRの鉄橋が落ちていて、その先の道は通れない状況でした。これはちょっとただごとじゃないなと状態で家へ帰って、その後、大変なことになっているというのがわかりました。私の同級生も一家五人流されて亡くなっていますし、先輩の中学生の息子さんも流されて亡くなっています。

これまで、この推進連絡協議会でいろんなことを学んできました。私は第1回からずっとノートを取り続けています。第1回、第2回、第3回のノート。先生方が発表した内容だとか、心に残ったことをメモに取っているんです。その中で、「子どもが命を守るために逃げることは、もちろんとても大事なんですけども、それで自分の住んでいるところを嫌いにならずに、自分の住んでいる地域に誇りを持って好きになる」ような教育を併せてやっていくことが、一番大事なんじゃないかなと思っています。

